

中国印論研究序説

川内 佑毅

はじめに

第一章 「印論」概要

第一節 「印論」の位置

第二節 研究対象とする印論

第二章 中国における印論研究

第一節 専門論著

第二節 単篇論文

第三節 注釈

第三章 日本における印論研究

第一節 中国印論の訳注・解題

第二節 日本の印論

第三節 関連論文

第四章 印論研究の課題

(一) 体系的な把握

(二) 他理論との関連

(三) 実作との関連

(四) 日本の印論受容

おわりに

はじめに

中国における印章は、春秋戦国時代の文書行政の確立に伴う古璽印の出現に始まり、秦・漢において制度化され様式が整理された。魏晋南北朝時代には、度重なる戦乱のほか諸社会条件に伴い、印の製造精度が下がり、格調は損なわれた。隋に至ると秦漢印の典型は失われ、異体の篆書体が用いられるなど、その運用に乱れが生じた。以上の通史における印章は、主に金・銀・銅などの金属、また玉を材料として制作された。

時を経て元代に至ると、趙孟頫（一二五四—一三二二）や王冕（一三二〇—一三五九）によって石材に印が刻されるようになり、古印の典型を範とする意識が萌芽し、刻印を風雅な文人芸として位置づける動きがおこった。

篆刻の興りである。併せて、趙孟頫が『印史序』を、吾丘衍（一二六八—一三二一）が『学古編』を著し、篆刻の理論構築が始まった。中でも『学古編』に収録される「三十五挙」は、印章理論の先駆けとして名高い。

吾丘衍の『学古編』からおおよそ三百年後の明代末期になると、文彭（一四九七—一五七三）の登場により篆刻の雅趣が引き上げられ、門人の何震（？—一六〇四）は皖派、程邃（一六〇五—一六九一）は歙派と称される流派を創始するに至った。篆刻文化が発展するにつれて古印の鑑賞・研究なども進み、次第に印章・篆刻を専門に研究する学問、すなわち「印学」が形成されていった（注し）。

題目の「中国印論」とは、そのような中で形成された印章・篆刻を専門に論じた文献著録を指す。書学における書論のよう、印章・篆刻に関する理論の記された文献を「印論」と称し、近年中国でこれを研究対象とした書物の刊行や研究が行われており、徐々に研究領域として形成されつつある。

専門論著としての「印論」は、大小含め約七十種の文献が現存しているが、書道史研究上触れられることは稀である。日本では、先行研究として一部の印論の訳注が散見されるものの、具体的な内容分析や理論の体系的な研究は乏しく、研究する余地のある領域といえる。

本稿は、印論の体系的な研究に則して、今日までの印論研究の実態と今後の研究課題を述べるものである。

第一章 「印論」概要

第一節 「印論」の位置

これまで印章・篆刻の研究領域では、その全体を「印学」と称し、そのうちの理論に関する研究・考証をまとめて「印学理論」と称することが多かった。研究領域を図式化した例として、巻末に附す「別表Ⅰ 印学研究分類簡略表」を参照頂きたい。

しかし、今世紀に入ってから以降、印章・篆刻研究には一段と拍車がかかり、「印学」の示す研究領域が多様化してきた。今回、「別表Ⅰ 印学研究分類簡略表」に倣って、今日までの研究領域をまとめ図式化を試みた。巻末に附す「別表Ⅱ 印学領域分類表(案)」を参照頂きたい。

「印論」は、印学における文献研究の対象の一つと位置づけられ、その内容は主に、技法論(字法・章法・刀法)、印章・流派に関する歴史論、印章における美学思想を含む審美論、道具の良悪や製法を論じた用具材論など多岐に亘る。なお、印学に関わる文献は、印論の他に、詩文、印譜序跋、印跋(側款

内容)が挙げられる。印論を研究する上で、これら文献との関連性の有無やその内容も研究対象となり得るであろう。

第二節 研究対象とする印論

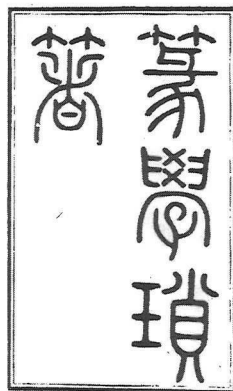
現在、印論の多くは叢書類に収録され、その内容を窺い知ることができる。ここでは主たる叢書を挙げて収録内容を概述する。それぞれの書物における収録内容の比較は文末に附す「別表Ⅲ 研究対象とする印論リスト」を参照されたい。

・『四庫全書』乾隆四十七年(一七八二)

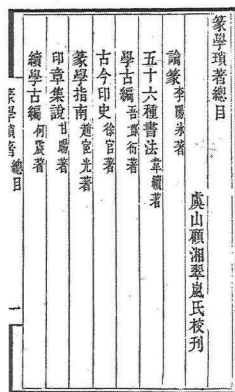
四庫全書における印論の収録は少なく、子部篆刻之属に吾丘衍『学古編』及び朱象賢『印典』の二種が収録されるのみである。

・『篆学瑣著』(篆学叢書)顧湘編道光二〇年(一八四〇)

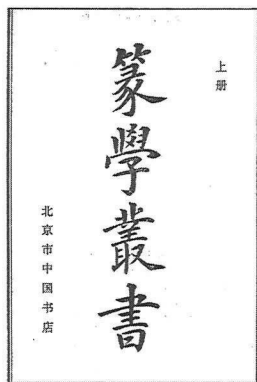
編者の顧湘(生没年不詳)は、字は翠嵐、号を蘭江、江蘇常熟の人で『小石山房印譜』を編した人物であるが、詳細は伝わっていない。この著は印論を専録した最も古い叢書であり、唐の李陽冰『論篆』から清の汪啓淑『統印人伝』までの印論三十種を録している。二種類の刊行が確認され、一つは前述の三十種を収録する『篆学瑣著』(二帙八冊、海虞顧氏刊)であり、もう一つは印論三十種に郭忠恕『汗簡』、謝景卿『選集漢印分韻』、謝雲隱『統集漢印分韻』を加えた『篆学叢書』(二帙十六冊、上海文瑞楼刊)である。重要な印論を多く採録するこの叢書は、後述の資料『歴代印学論文選』や『統修四庫全書』において底本として数多く使用されている。



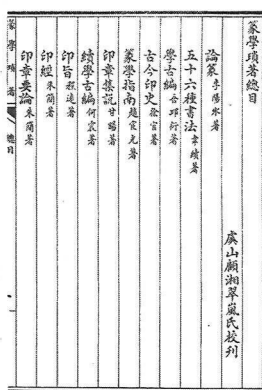
▶『篆学瑣著』封面



▶目録第一葉



▶『篆学叢書』(中華書店復刻本)封面



▶目録第一葉

・『美術叢書』黄賓虹、鄧实編 一九一一年

美術・芸術に関する論著を集録した叢書であり、内容は書画類・雕刻摹印類・瓷銅玉石類・文芸類・雜記類に類別され、二百八十余种を収録する。印論は、陳澧『摹印述』、陳鍊『秋水園印說』、葉爾寬『摹印伝灯』、吾丘衍『学古編』、姚覲元『附三十五举校勘記』、桂馥『続三十五举』、姚晏『再続三十五举』、黄子高『続三十五举』、甘暘『印章集說』、万寿祺『印說』、吳騫『論印絶句』、姜紹書『韻石齋筆談』、趙宦光『篆学指南』、魏錫曾『續語堂論印彙録』、戴啓偉『嘯月楼印賞』など十余種を採録する。

・『遯庵印学叢書』吳隱編 一九二〇年

西泠印社創設者の一人である吳隱による編著。印論二十五種を収める。収

録する印論は、文彭『印史』(甘暘『印章集說』)、万寿祺『印說』、沈野『印談』、汪維堂『摹印秘論』、朱象賢『印典』、陳克恕『篆刻針度』、馮泌『印学集成』、阮充『雲莊印話』、馮承輝『歷朝印識』、『国朝印識』、王之佐『宝印集』、陳澧『摹印述』、葉爾寬『摹印伝灯』、董洵『多野齋印說』、魏錫曾『續語堂論印彙録』、姚覲元『三十五举校勘記』、葉銘『葉氏印譜存目』、王世『治印雜說』。

日本国内での収蔵が非常に乏しく、現在確認できているのは陳克恕『篆刻針度』のみである。引き続き収蔵先を調査したい。

・『歴代印学論文選』韓天衡編 一九九九年 西泠印社

上下巻全三編からなり、内容は印学論著、印譜序記、印章款識に類別される。印論は、「第一編印学論著」に収録され、李陽冰『論篆』から馬衡『談刻印』までの四十九種を録している。また、それぞれに解題が付されて、使用した底本が明記されている。『篆学瑣著』、『美術叢書』の内容に加えて、稀覯本や善本のテキストが活字化されたことは印論研究において大きな功績といえる。

・『続修四庫全書』二〇〇二年 上海古籍出版社

子部藝術類に複数の印論が収録される。収録内容は以下の通り。秦祖永『画学心印』、孔繼浩『篆鏤心得』、陳克恕『篆刻鍼度』、顧湘『篆学瑣著』(前述の印論三十種)、沈清佐『沈笈邨選抄印学四種』(『印鑑牋』、『古今印說補』、『印譜摘要』、『印說』)、計三十七種。

第二章 中国における印論研究

第一節 専門論著

論著としての印論研究は、黄惇（一九四七—、南京芸術学院教授）の実績が大きい。

氏は、著書『中国古代印論史』（一九九四、上海書画出版社）において、元・明・清の印論について、それぞれの時代における印論の特色を指摘した。中でも特筆すべきは、篆刻の審美観に関する言及である。楊維禎（一二九六—一三七〇）『方寸鉄志』を引用し、元の時代に既に石鼓文や嶧山碑などの文字を応用して印を作成していたことを論じた。そして、印論中の美学観として、「自然天趣説」、「印如其人説」、「筆意表現説」、「伝神説」、「感興説」、「学養論」、「入古出新論」などを挙げ、その特徴を示している。また、論述中に見える審美観に関わる記述と同時代の印章とを比較しその共通性を指摘するなど、実作と理論の関連を論じている。このような研究方法は歴代の印論における論述にはないスタイルであり、現代における印論研究の一つの範となり得るものである。

また、同氏による『中国印論類編』（二〇一〇、荣宝齋出版社）は、印論の記述を内容によって類別し整理したものである。印論は、論印章源流沿革、論印人流派、論印譜、論印章審美、論篆刻創作技法及印材工具の五編に分類され、該当する箇所を記載しその底本及び校勘を記している。各編の分類は以下の通りである。

第一編 論印章源流沿革

第二編 論印人流派

一、論印人

- (一) 論宋代印人
- (二) 論元代印人

- (三) 論明代印人
- (四) 論清代印人

二、論流派

第三編 論印譜

- 一、論集古印譜与摹古印譜

- 二、論文人創作印譜

第四編 論印章審美

- 一、宗法
- 二、印与詩文書画一体論

- 三、模擬 反模擬
- 四、古意 古今

- 五、自然天趣説
- 六、筆意論

- 七、印如其人説
- 八、巧拙 雅俗

- 九、寄託
- 十、情性

- 十一、興到
- 十二、写意 伝神

- 十三、風格 趣味
- 十四、印従書出論

- 十五、印外求印論
- 十六、入古出新

- 十七、品評
- 十八、学養

第五編 論篆刻創作技法及印材工具

- 一、創作技術綜論

- 二、論篆法、字法

- 三、論章法

- 四、論刀法

- 五、論辺款及其他技法

- (一) 論辺款
- (二) 論其他技法

- 六、論印材及治印工具

- (一) 論印材
- (二) 論治印工具

収録される文献は、宋から民国に至る印論専著、篆刻専著、印譜序跋、詩文

集、筆記雑著、印章辺跋（側款文）など広範囲に亘る。また、一部の資料は書画作品の実物や地方志の記述を原本として採録しており、著者の知見の広さを感じさせられる。このような、文献の記述を内容に準拠して類別した書物は印論史上初であり、研究史上の大きな功績といえる。

韓天衡『中国印学論文選』・黄惇『中国印論類編』の刊行によって、文献の活字化と校勘がなされ、内容分類の整理が行われたことは大きく、海を隔てた日本において研究を進めるにあたってこの上ない資料である。

第二節 単篇論文

印論を扱った論文は、少ないながらも散見される。ここでは、近現代の価値があると思われる研究実績を挙げてその概要を述べたい。

・呉静忱「晚明印論研究」（二〇〇五年、玄奘大学（台湾）、修士学位論文）

明末の主要印論として、周応願『印説』、甘暘『印章集説』、沈野『印談』、楊士修『印母』、徐上達『印法参同』、朱簡著録（『印品』、『印経』、『印章要論』）の六種を挙げ、明末印論の特徴として以下三点を論じる。

一、擬古主義と革新主義の対立。明末の社会情勢が影響し、古を貴ぶ尚古主義的な論述と、古いものを脱する創新変革の風潮による論述が対立し、一つの論争となって展開している。

二、詩文・書画理論の援用。印論中の「神」、「神品」などの概念が、『文心雕龍』における「神思」理論と関連性があることを指摘する。また、印における線質について、書法の線質理論（錐画沙、印印泥など）を基として論じており、「書印同理」の思想が見えることを指摘している。また、印論中における書論の引用なども紹介する。

三、品格・等級の基準の確立。周応願『印説』、甘暘『印章集説』、朱簡『印品』において、書論における品等の方法を援用し、逸品・神品・妙品・能品な

どの等級を以て篆刻の格付けを行っていることを指摘し、それぞれの等級が篆刻における美学思想（筆意論、自然天趣論など）と関わりがあることを論じた。

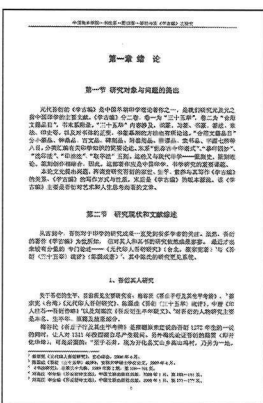
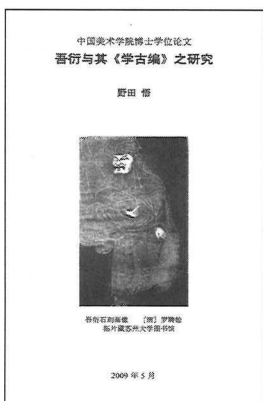
篆刻における美学思想についても論述はあるが、その指摘内容は前述の黄惇『中国古代印論史』とあまり大きな相違はないようである。

・野田悟「吾衍与其『学古編』之研究」（二〇〇九年、中国美术学院、博士学位論文）

『学古編』および著者の吾丘衍について、一次資料の精察と徹底した実地調査を基とした、詳細な考察による研究。

吾丘衍研究としては、吾丘衍の生没年や出自に諸説ある中、氏は郷里での実地調査や文献考察を行い、従来不明瞭であった出生地・居住地などを明らかにした。また、現存する吾丘衍の書いた篆書を基に文字比較を行い、説文解字並びに李陽冰の篆書と多く合致する点を指摘した。

『学古編』研究としては、稀覯本を含む『学古編』の刊本十八種を収集し各版の詳細な調査を行った。その結果、大元となった初版本を推定し、それぞれの刊本の関連と刊行の流れを図式化し、その系譜を明示した。また、詳細な校勘と考証を行い、字句が異なる場合の解釈の違いなども論じた。



▶「吾衍与其『学古編』之研究」表紙 ▶本文第一頁

・陳国成「古代印論中復古思想研究」(二〇一二年、『古籍整理研究學刊』五号、所収)

『論語』以来、中国における一つの大きな社会通念である「復古思想」が、印論においてどのような形で表出しているか述べた論考。復古思想が基となつて秦漢印を範とする思想が構築され、印論において多分に論じられたとし、元・明・清代における印論にみえる古を範とする復古思想・尚古主義的な理論について考証を行っている。

・陳国成「中国古代印論的理論淵源与框架結構研究」(二〇一二年、吉林大學、博士学位論文)

上篇と下編からなる。上編は、中国古代印論の理論の起源について論じる。まず、文学、書法、絵画などの理論の起源について論じた後、それらの理論・概念の印論へ援用を指摘している。文学論における「氣勢」・「氣韻」・「氣質」概念との共通点、書論における「金石氣」、「書卷氣」、「雅俗」観、「五行五乖」論の援用、画論中の品評における基準「逸」・「神」・「妙」・「能」と印論品評の共通性などを挙げる。下編は、中国古代印論の構成をテーマに、秦漢を範とする理論の確立、尚古思想と復古運動、印人流派の出現、文人の意図と工匠の技、印章における審美基準(印品・巧拙雅俗・印如其人)について論じている。

第三節 注釈

注釈・語訳の類は、管見では左記一件を見るばかりである。

・葉一葦「清・袁三俊《篆刻十三略》注評」(一九八六年、中国書法家協會浙江分会刊『篆刻家』、所収)

袁三俊の伝と簡単な解題を付し、原文中語句について詳細な語釈を行っている。但し、現代語訳は行われていない。

この他、雑誌記事や研究集録などに収録されている可能性もあるので、今後も調査を進めたい。

第三章 日本における印論研究

第一節 中国印論の訳注・解題

管見では下記の文献がある。

●吾丘衍『学古編』(一三〇〇年)

・角田健三訳「学古編」(『国訳書論集成』巻五所収、一九三八年、東学社)

張海鵬本を底本とし、誤字脱字は姚観元『三十五学校勘記』に従う。

・細谷忠志「学古編三十五学校考」(『研究紀要』第十八号所収、一九八五年、聖徳学園短期大学)

「和刻本学古編」(『和刻本書画集成』第八輯所収)を底本とし、『篆学瑣著』、『篆学叢書』、『美術叢書』、姚観元『三十五学校勘記』に基づいて校勘し、訓詁注釈を行っている。

●朱象賢『印典』(二七二二年)

・伏見冲敬「訳注 印典」(日本篆刻社編『篆刻』一〇八〇、一九八二)二〇〇三、東京堂出版)

季刊発行された『篆刻』(主幹・北川博邦)で連載された『印典』の訳注。

●桂馥『統三十五学』(一七七八年)

・三好凌石訳「統三十五学」(『国訳書論集成』巻十一所収、一九三七年、東学社)全文を訓読し注釈を加える。校勘については記述が曖昧で不明瞭であり、資料として使用する場合は検証が必要と思われる。

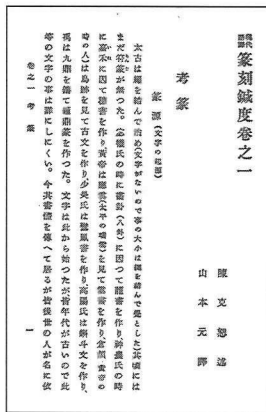
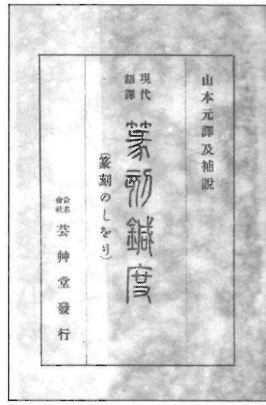
●陳承恕『篆刻針度』（一七八六年）

・圓山大迂『篆刻思源』（一八九九年）

書名は異なるが『篆刻針度』の訳本である。原著全八巻のうち、六巻までを訓読する。

・山本元『現代語訳篆刻針度（篆刻のしをり）』（一九二八年、芸艸堂）

『篆刻針度』全訳本。文語体ではなく口語体で訳されている点が特徴である。巻頭に解題および「篆刻の仕方」を付す。解題では印論史が概述され、前掲の『篆刻思源』にも触れ、明治期における支那人の印論への認識、また日本人の印論受容などについても簡略に述べている。「篆刻の仕方」は、篆刻の手順について図式を交えて解説した啓蒙文である。



▶『現代語訳篆刻針度（篆刻のしをり）』表紙

▶本文第一頁

●姚晏『再統三十五挙』（一八一八年）

・三好凌石訳「再統三十五挙」（『国訳書論集成』巻十一所収、一九三七年、東学社）

全文を訓読し注釈を加える。校勘については記述が曖昧で不明瞭であり、資料として使用する場合は検証が必要と思われる。

●王世『治印雑説』（一九一七年）

・石井雙石『篆刻指南』（一九三六年、東学社）※一九六三年刊復刻本あり。

著録中、「第三編 治印雑説」として全訳を収録する。

●馬光棍『三統三十五挙』（一九二八年）

・三好凌石訳「三統三十五挙」（『国訳書論集成』巻十一所収、一九三七年、東学社）

全文を訓読し注釈を加える。校勘については記述が曖昧で不明瞭であり、資料として使用する場合は検証が必要と思われる。

第二節 日本の印論

日本の篆刻は、明朝の崩壊に伴い多くの黄檗僧が日本に渡来したことが契機となり、その歴史が始まった。具体的には、東臯心越（一六三九—一六九六）などの禅僧に教えを受けた細井廣澤（一六五八—一七三六）や、石周麟（生没不詳）に教えを受けたとされる今井順斎（一六五八—一七一八）らが技法を習得し、日本篆刻の礎を作ったとされる。彼らが没した後の宝暦年間（十八世紀中ごろ）には、日本人による印論が著され刊行されるようになった。ここではその主たる著録を確認したい。

・『鉄筆集註』二巻 木母馨著 宝暦二年（一七五二）刊

上下二巻からなる。巻上はまず印章の何たるかを説き、次いで篆法、書体、印制に及ぶ。巻下は刀法、用印法、参考書、鈕式を挙げ、次に石印の製法について初学者を対象としたわかりやすい解説をし、また用具について述べ、附録として双鉤・学字・拓本の採り方を添えている。

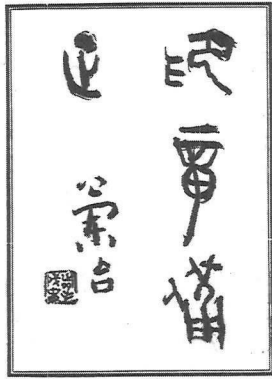
刀法については十二刀法を挙げるが、これは名目に過ぎないとして、単入正刀法、単入斜刀法、双入刀法の三法を主に挙げる。その技法論として、中鋒を是とし偏鋒を非としている点の特徴である。

また、参考にすべき書籍として、『説文解字』、『正字通』、『金石韻府』、『学古編』、『撫古遺文』、『六書精蘊』、『古今印史』、『篆体異同歌』、『古篆彙選』、『秦漢印統』などを挙げており、当時の印学の認識の一端を把握することができる。

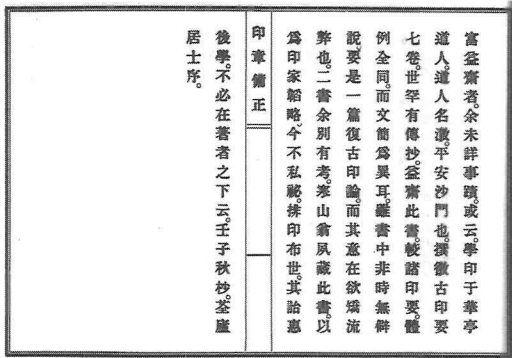
・『印章備正』七卷 富取益齋著 大正二年（一九一三）※一七八二年

卷一は古体印説、卷二・三は字法、卷四は文法、卷五・六は制度、卷七は今体印令と分けて論じており、秦漢印を範とする復古主義の論調で書かれている。

写本として伝わっていたものを大正二年に山田寒山が刊行し、広く普及した。寒山の例言によれば、文意の解し難き所は尽くこれを改謬補訂し、欄外には丁未印社同人の手により補注を附したという。巻首に初世中村蘭臺、次いで杉聴雨の封面、永坂石埭の題詩、徳富蘇峰及び河井荃廬の序文が附されている。時の実力者が名を連ねることから刊行数も多く、普及した書物といえる。しかし、後に三村竹清によって、この著は杜澂（一七四八—一八一六）著であ



▶初世中村蘭台封面



▶河井荃廬序文

る『澂古印要』（一七八二年刊）の写しであると指摘されており（注2）、このテクストの成立は一七八二年とする見方が正しいといえる。

・『印籍考』曾谷学川著 享和二年（一八〇三）

中国古印譜を中心として印論や篆刻関連雑記、日本の印学者録など、当時流通していた篆刻関連書物を「印籍」と総称し、品目を行った著書。正品、絶妙品、能品、奇品、精巧品の五品に分ち、所々短評を加えている。

曾谷学川（一七三八—一七九七）は、曾之唯とも称され、高芙蓉の高弟として著名な人物である。収録されている書名は、当時見ることのできるものとしてはほぼ全てが網羅されていると考えられ、高芙蓉らのいわゆる「古体派」の印人たちの印学の水準を窺い知ることのできる重要な資料でもある。

・『篆刻新解』楠瀬日年著 昭和七年（一九三二） 春陽堂

本書は篆刻の技法解説をする概論書としての側面と、印の良し悪しを論じた審美論の両側面がある。

前半では、字法、刀法、朱文・白文の違い、印の種類とその様式、古銅印・石印の鈕式ついて、印の材料、印刀・印材の手入れの方法など実技面の解説を記す。

後半の「印の変遷」では、中国と日本の印の歴史をそれぞれ解説し、「印の上達」では、「印の良不良」をテーマに挙げ、良い印の要素として古印に宿る「古拙味」と「氣韻」を挙げ、また自然な趣きや先人の作品に近づこうと努力する中で無意識に自我が表出されることを「無意識の中の想化作用」と称し、それらの要素の濃く薄いと高い卑しいとで作品の優劣が評価されると述べている。

また、刻印の参考として著名印譜四六種を挙げ、巻末に主要な印影二百余を附している。篆書の学書参考として、鄧完白・趙之謙・楊沂孫・呉大澂・呉昌

碩らの主要な書蹟名を挙げ、主要な篆書の筆順を明の陶郁の説を挙げて解説している。

・『篆刻指南』石井雙石著 昭和二年（一九三六年） 東学社

全四編からなる篆刻を総合的に解説した書物である。第一編は、篆刻手引とし、手順の解説および落款印、收藏印、住所印、引首・押脚印などの決まりについて説く。第二編は篆刻入門とし、古璽印に始まる印の歴史および様式の変遷について作例を交えて概述する。第三編では、王世『治印雜説』の訳注を附す。第四編は用刀及工具とし、刀法および押印の仕方などを説く。

また、戦後における篆刻を総合的に論じた書物としては以下の二種が有益である。

・『印章綜説』吉本文平著 昭和四六年（一九七一年） 技報堂出版

吉本文平は、窯業協会学術賞受賞、日本学術会議会員、日本鉱物学会会長などの経歴の持ち主で印章は主業ではないが、関野香雲（一八八七—一九五九）の門に篆刻を学んだ人物である。

内容は、印章の歴史・種類・形態・素材・製法（銅印・石印）・文献・人物・社会との関わりにトピックに分け、各内容について詳述を施している。文献の項目では、中国・日本の主要印論を挙げ、版本写真と解題を附しており、また主要印譜や関連文献についても細かく整理している。

・『印章篆刻の栞』水野恵著 昭和五三年（一九七八年） 芸艸堂

水野恵（一九三一—）は、篆刻を河井章石（一八七六—一九五六、河井荃廬の弟）、園田湖城（一八八六—一九六八）に学んだ後、展覧会や書道会に所属せず、専ら印章業の知見から印を刻し、著書では独特な思想に基づき理論を提

唱している人物である。

本書は、印章に関する随筆的な側面が強い。「第一章 何故ハンコを捺さねばならないのか」では、印章の社会的存在意義について説き、また、「第四章 どんなハンコがいいのか」では、字法・章法における篆刻の美意識を独自の理論で述べている。

その骨子は以下の通りである。書作の目的は、文字を書くことによって言葉の意味内容を伝えることではなく、美しさの表現にある。単に法に適っているかどうかが基準となるのではなく、そこから「いのち」が感じ取られるかどうかが重要である。書の伝統を尊重し厳しい書の修練が不可欠である一方、「いのち」が発露するためには文字性を超克し、章法において個性を表現することが必要である。最終的には、「草果（※章法を指す造語、筆者注）は仮の姿であり、章果を借りる契機に於いてのみ個性を磨くしかない」と述べる。

氏の主張をまとめると、字法においては伝統と規格を逸脱せず、章法の点において個性を表出して独自性を追求するという考えである。奇抜な考えではあるが、現代における種々の独特な印章の美学思想の提唱と捉えることもできる。しかし、氏の刻す奇抜な章法による印章が従来の篆刻芸術の法と大きな隔たりがあるため、この思想を評価する声は稀である。

第三節 関連論文

日本の印学を題目に書かれた論文はほぼ皆無に等しいが、二〇一三年十一月時点においては該当する論文が一件ある。

・李中華「明清印学の東瀛伝播—江戸時代、高芙蓉一門の印学研究—」（大野修作訳、二〇一三年、『書法漢学研究』第一三号、所収）

印聖、高芙蓉（一七二二—一七八四）およびその漢学塾「混沌社」の門人であった木村兼葭堂（一七三六—一八〇二）、曾之唯らの印学研究の実績とその

評価を述べ、高芙蓉一派の印学研究の日本篆刻史上における位置づけを行った論文。

第四章 印論研究の課題

印論の先行研究を概括したうえで、これまでの先行研究で触れられていない題目を挙げてみたい。

(一) 体系的な把握

中国の印論は、一九九六年に黄惇『中国古代印論史』が刊行されるまで殆どその内容は明らかでなかったといえる。氏はこの著書で歴代の印論を挙げ、印論の中にどのような審美思想と概念が生まれたかを個別に抽出して指摘した。しかし、それら個別の論説がどのような経緯で生まれ、後の理論にどのような影響を与えたかなどの相関関係には踏み込んでおらず、印論の体系的な把握は今後研究を深める余地があるといえる。

(二) 他理論との関連

第二章 第二節 単篇論文にて紹介した陳国成「中国古代印論的理論淵源与框架結構研究」では、文学論、書論、画論などの理論・概念が印論へ援用されていることが指摘されており、参考とすべき先行研究の一つである。しかし、印論中には氏が指摘する以外にも史書や書論の引用が散見されており、それらの思想の印論への影響については未だ指摘はなされていない。これらの引用部分をピックアップし分析・考証をして、印論と他理論の関連性についての研究をより深化させたいと考えている。

(三) 実作との関連

印論の理論が実作において実際にどのように影響し、作風の淵源となっているかについては、黄惇『中国古代印論史』において若干試みられているが、その数は乏しく、今後追及の余地があると思われる。具体的には、技法論（字法・章法・刀法各論）の展開を明るみとし、実作の展開と照らし合わせその関連性を探りたい。また、印跋（側款内容）や印譜序跋などの記述も参照して比較・分析することなどを検討する。篆刻芸術の流派・風格を紐解く題目となるであろう。

(四) 日本の印論受容

日本における中国の印論研究は、若干の訓詁注釈がなされている程度であるが、訓詁注釈が行われた背景には、明治・大正期に多数の印人が大陸へ渡り、徐三庚や呉昌碩などの印人に技法や理念を直接学び影響を受けた経緯がある。彼らは刻印の技法とともに印学の手解きも受け、その中で印論を読み解きその要素を自身の印業に取り込んでいったことが想定される（注3）。この点に基づき、日本印人の作品における印論の影響を精査し指摘することも題目の一つとなり得よう。中国の印論の影響を受け、日本人が著した印論についても研究を要するところである。

おわりに

日本における印論研究は、東皐心越などの亡命禅僧らによって日本人に篆刻文化が伝播された後ほどなくして始まり、江戸中期の高芙蓉の登場で本格を指した印学研究が始まり、その門人らの研究を経て脈々と受け継がれてきた。『現代語訳篆刻針度（篆刻のしおり）』序文に、著者山本元は以下のように述べている。

我国人で印論の書を著した人が多いが、その刊行されて広く行われて居るものは石印集誼、石華印説、印章備正、篆刻思源などである。皆支那人の印書の抄録にかかるもので、特殊の説をなして居るものは少ない。篆刻を試みようとするには是非とも一通りは印論の書を読み置くべきである。(中略) …元の吾丘衍の学古編、明の徐官の古今印史、周公瑕の印説、甘旭の印正附説、朱象賢の印典、清の袁三俊の篆刻十三略などは我国の先正の印論に引拠したもので、一般に読むべきものである。

かつては篆刻を学ぶ過程において、印論の内容を把握することは必須のプロセスであった。近代になると、渡清し中国人より薫陶を受けた圓山大迂や楠瀬日年ら印人が『篆刻針度』などの中国印論を範とし、数々の篆刻概述書が執筆された。その中には、独自の審美観から印章の優劣を述べたものも存在する。併せて印論の訓古注釈も少なからず行われた。現在確認できる印論の訓読・語訳の殆どは、明治から昭和初期にかけて作られたものである。

時を経て、今日の篆刻を解説する著書において印論の内容に触れられることは極めて珍しいといえる。今日、書道展等で見ることでできる篆刻作品の多くは表現を追求するあまり過度な妍美を呈しており、鑑賞する上で説得力に欠けると感じざるを得ない。その原因の一端は、理論の不在にあるのではないだろうか。中国印論の篆刻についての美学理論というものが殆ど忘れ去られてしまった今日において、改めて璽印の歴史を再認識し、印章の理論と思想の起源を明確なものとし、実作との関連を再考する、中国印論研究はそのような意識をもって進めている。

【注】

(注1) 中国印章の歴史概説は多数あるが、主に下記の著録を参照した。

・羅福頤、王人聰著／安藤更生訳『中国の印章』(一九六五年、二玄社)

・中田勇次郎「中国印章概説」(『書道全集』別巻一印譜中国所収、一九六八年、平凡社)

・小林斗盞「印の歴史」(『書道講座』第六巻篆刻所収、一九七三年、二玄社)

・鄧散木著／北川博邦・佐野光一・袁毛義樹・佐野榮輝共訳『篆刻学鄧散木のすべて「改訂版」』(一九八一年、東方書店)

・沙孟海著／中野遵、北川博邦共訳『篆刻の歴史と発展—印学史—』(一九八八年、東京堂出版)

(注2) 三村竹清「五適先生杜澂伝」(『三村竹清集五』収録、一九八三年、青裳堂書店) 参照。

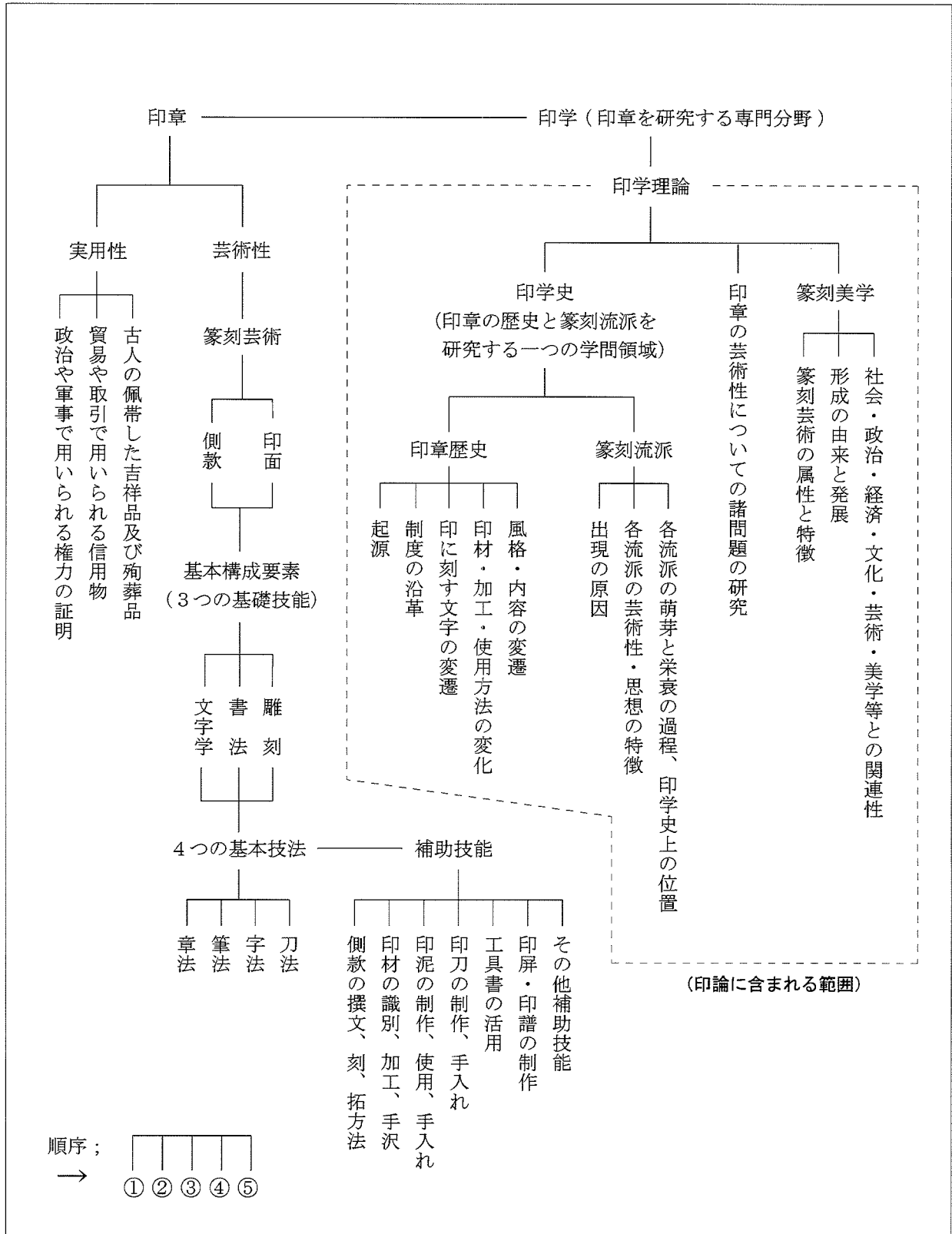
(注3) 明治・大正期に渡清した主な印人は以下の通り。圓山大迂は一八七八年(明治一一)に渡り徐三庚・吳昌碩に学ぶ。桑名鐵城は一八九七年(明治三〇)に渡り徐三庚・吳昌碩に学ぶ。河井荃廬は、一九〇〇年(明治三三)に渡り吳昌碩に益を受けた。この時、五世濱村蔵六・村田蔚堂らも随行した。その後も複数回渡清し、一九一九年(大正八)には山田正平が随行し、吳昌碩・徐星州と親交している。この他、楠瀬日年や北大路魯山人も渡清し、徐三庚や吳昌碩に教えを受けた。

日本印人の印論受容に関しては、『現代語訳篆刻針度(篆刻のしおり)』序文に以下のようにある。

我国の圓山大迂が清国に遊んだ時に同地の徐三庚は本書(篆刻針度)と篆字瑣著とを繙読せよと其書を与へたという。(括弧は筆者補足)

これはほんの一例にすぎないが、代表的な印論の内容を理解することは中国の印学では必須のことであり、圓山大迂が帰朝後に篆刻針度の訳本である『篆刻思源』を著し、河井荃廬の監修による『国訳書論集成』では印論が四種取り上げられている点などからすれば、日本の印人が大陸の篆刻理論を吸収しそれが制作に影響していることは推測に容易い。

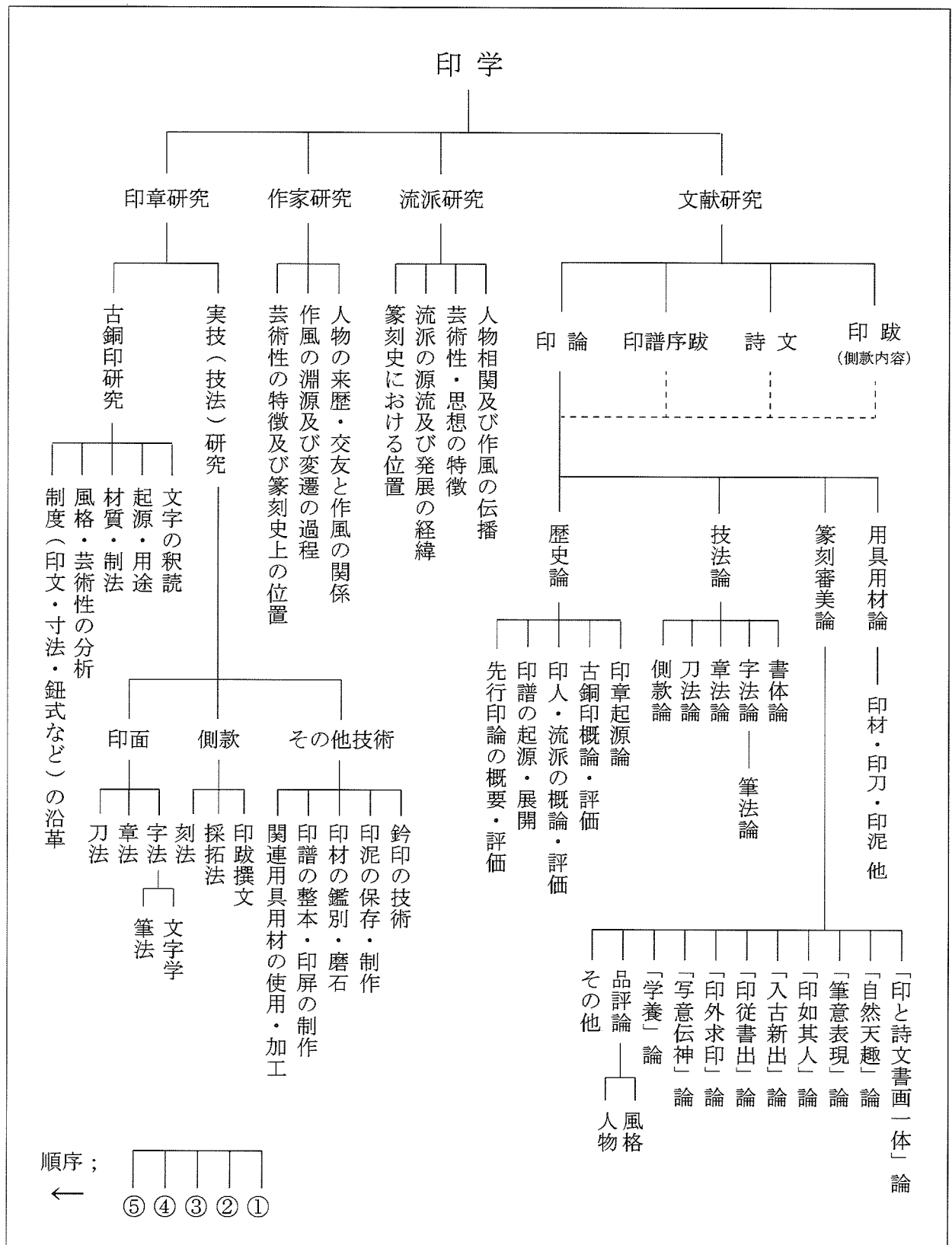
〔別表 I〕 印学研究分類簡略表



※ 原表は、余正編「印学研究分類簡表」（『篆刻家』所収、中国書法家協会浙江分会刊、一九八六年）。

※ 表中の語句は筆者による訳。また、点線および括弧は筆者による補足である。

〔別表Ⅱ〕印学領域分類表（案）



〔別表Ⅲ〕 研究対象とする印論〕又ト

No	書名	著者	時代	成立	収録書					内容											
					四庫全書	欽定四庫全書	皇朝書目	通志印學	清代印學文選	續修四庫全書	書体	字法論	章法論	刀法論	古印概要	古印品評	書物標題	篆字體	古人引用		
1	論篆	李陽冰	唐	?		○															
2	五十六種書	韋統	唐	?		○															
3	學古編	吾丘衍	元	1300	○	○	○														
4	古今印史	徐官	明	1569	○	○															
5	翰學古編	何震	明	?	○	○															
6	印說	沈野	明	1600			○														
7	叙書面印識	張祿文	明	1595				○													
8	印章集說	甘暘	明	1596		○	○														
9	印母	楊士修	明	1602					○												
10	周公謹「印說」刪(篆學指南)	楊士修	明	1602		○				○											
11	印旨	程遠	明	1602		○															
12	印品	朱簡	明	1611																	
13	印法參同	徐上達	明	1614					○												
14	印經	朱簡	明	1619		○				○											
15	印章要論	朱簡	明	1619		○															
16	印章法	潘茂弘	明	1625					○												
17	印說	万壽祺	明	1635				○													
18	隄石齋筆談	姜紹書	明	?						○											
19	印章考	方以智	明	?		○															
20	印史	文彭	明	?				○													
21	敎好堂論印	吳先声	清	1687					○												
22	印典	朱象賢	清	1722	○					○											
23	秋水園印譜 印說	陳鍊	清	1760		○	○														
24	古印考略	夏一駒	清	1773		○															

No	書名	著者	時代	成立	収録書					内容										
					四庫全書	欽定四庫全書	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志	皇朝通志				
49	印言	陳鍊	清	?		<input type="checkbox"/>														
50	印學管見	馮承輝	清	?		<input type="checkbox"/>														
51	摹印秘論	汪維堂	清	?																
52	精三十五拳	黃子高	清	?			<input type="checkbox"/>													
53	印說	龔自珍	清	?				<input type="checkbox"/>												
54	三十五拳 校勘記	姚鼐元	清	?			<input type="checkbox"/>													
55	硯林印款 書後	魏錦曾	清	?			<input type="checkbox"/>													
56	印說	齊璜	清	?				<input type="checkbox"/>												
57	摹印秘論	汪維堂	清	?			<input type="checkbox"/>													
58	篆隸心得	孔繼浩	清	?					<input type="checkbox"/>											
59	論印絕句	吳騫	清	?		<input type="checkbox"/>		<input type="checkbox"/>												
60	歷朝印識	馮承輝	清	?			<input type="checkbox"/>													
61	國朝印識	馮承輝	清	?			<input type="checkbox"/>													
62	敦好堂論印	吳先声	清	?		<input type="checkbox"/>														
63	沈蕙邨選抄印學四種 (印錄選、古今印說補印、續鑒、印說)	沈清佐	清	?					<input type="checkbox"/>											
64	說篆	許密	清	?		<input type="checkbox"/>				<input type="checkbox"/>										
65	續語堂論印彙錄	魏錦曾	清	?			<input type="checkbox"/>													
66	靈莊印話	阮光	清	?			<input type="checkbox"/>													
67	治印雜說	王世	民國	1917			<input type="checkbox"/>													
68	古印概論	黃質	民國	1930				<input type="checkbox"/>												
69	談刻印	馬衡	民國	1944				<input type="checkbox"/>												
70	葉氏印譜存目	葉銘	民國	?			<input type="checkbox"/>													